

静岡大学理学部同窓会会報

NO. 8

発行所
静岡大学理学部同窓会
静岡市大谷836
静岡大学理学部内
Tel054-237-1111(代)
会長 赤池大樹

「静大理学部」同窓生の皆様へ

同窓会会長 赤池大樹



八十四年八月三日設立総会を開いてから、七年が経ちました。この七年間の私の変化は髪の毛が薄くなったり、お腹が出たりの体の



古風な雰囲気漂う大岩校舎から砂塵の舞う現代的新校舎へ最初に移転した年から数えるとはや四半世紀にもなる。新校舎で初めてお目にかかったコンピューターは一文命令の機械語で入力する卓上機であった。そのマシンでの計算例として水道蛇口から落下する直前の水滴形状曲線を森口先生の講義で見せて頂いた場面は一種の感動と共に記憶

か。結婚、出産、転勤、はたまた父母との死別等々、時の流れに否応なく流されて生きていくうち、新しい喜びの出会いがあればまた悲しい別れもあります。この事はどうしようもないこととす。仕事の上での出会いや別れには、えてして損得感情が入りますが、同窓会では気持ち若返って気楽に話し合える場となるのではないのでしょうか。

さて同窓会の運営につきましては、会員の皆さん特に役員の方々のご協力によりまして、新しい名簿が出来ましたが、いろいろの不備な点があるかと思いますが、何分にも大変な作業でしてご容赦願いたいと思います。去年の八月二五日に第三回総会を開きました。残念ながら出席者が大変少なく、久しぶりに教え子に会えると思ってお越しいただいた

に残っている。それは中学時代に表面張力で水面に浮かぶ水滴を見ていた場面と重なったからでもあった。ところで、表面張力を伴う水の重力波には興味深い性質がある。この波は振幅が適度に大きい場合には通常、波同士が衝突してもその前後で殆ど形を変えずに伝播する孤立波として振る舞う(少し変形するが厳密にはソリトンと区別する)。しかし、ある振幅ではこの波を記述する非線形発展方程式の、初期値が僅かに異

張力のコンピュータ物理学二題

エイ・エス・アイ株式会社 吉村和美

でも見られる。どの系でどんな非線形現象が現れるかを調べることは自然の本質を理解する上で興味深い。もう一つ張力に関して興味あるのは、その歪エネルギーで変形した自在定規から得られるスプライン曲線であ

なる二つの解の差は時間と共に指数関数的に増大する。即ち、長時間後の解は初期状態に強く依存して予測がつかないカオス的振る舞いをする。同様な波は磁気音響波や非線形電気回路

同窓生の声

笹原良一

卒業して四回目の夏です。開会には時間があるので、街を歩きました。変わらな

発した二十一世紀ビジョンに従い、事業の多角化をはかるべく、ニュービジネスに取組んでいます。この世界の先行別には、事業の成否は別としても、ミイラづくり、自叙伝代筆、ピラニアや電気ウナギの釣店、気球からのダイビング等の楽しいものをいろいろ。さて当社は何をしたものと頭を痛めています。(生物第一回卒)

近況報告

北川岳夫

吉富製薬㈱に入社して二十三年、光陰矢の如しとは、真に実感。社内では一貫して医薬の業務に専念し、近時五年は総合的な研究開発の企画や他社協業を推進して来ましたが、AB作戦の戦略として日本たばこが取組んだリストのうち、最大の柱となつた医薬事業での協業もその一つ。



1991年8月25日 理学部同窓会

も有用である。実際、微分方程式の解を表す関数はその式に含まれる微分程度の滑らかさが有るだけで十分な場合が多いからである。コンピュータが発展してくるにつれ、人間が逆にそれに使われる錯覚の話も有るが、フェルミ||パスタ||ウラムの数値実験例のように新しい概念を発見したり、人間と環境との調和に役立

収入の部	前年度よりの繰越	364,994
	年会費・寄付 (257件)	393,400
	入会金 (48件)	96,000
	名簿代 (48件)	48,000
	特別寄付 (48件)	96,000
	受け取り利息	1,509
	計	999,903
支出の部	印刷費	75,705
	通信費	276,310
	会議費、事務用品費等	182,580
	特別支出	0
	名簿代金積立	100,000
	計	634,595
	差引残高	365,308

以上報告致します。
平成3年3月31日
会計担当理事 浅野安人 杉本寿久 金子正純
監査の結果、報告のとおり相違ありません。
監査 佐藤洋一 松山初男

これは一九九一年八月二十五日、日興会館で開かれた理学部同窓会における講演の一部です。(編集部)

方丈記の冒頭に「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」と記されているが、しばらくの間、過ぎし時を思い出しもどりの水を味わってみたいと思う。

私は理学部が発足した昭和四十年に工学部から理学部に配置換えされ、この三月に定年退職するまで、理学部に在職しました。ただし実際に理学部に勤務したのは大学の事情により昭和四十二年からです。思い出は私の個人的なものに偏ると思えますけれども、御了承をお願いする次第です。

理学部の歴史を振り返って、私はこれを昭和四十年から昭和四十九年までの「草創期」と昭和五十年から現在までの「発展期」に二つに分ける。

I 昭和四十年に従来の文学部が人文文学部と理学部に改組され、教養部が設置された。しかし理学部に実際に学生が入ってきたのは昭和四十二年で、三年生・四年生が共にいるのは四十二年からであるから、理学部が事実上発足したのは昭和四十二年・四十三年といつて良いであろう。

(1)昭和四十三年に私は学生委員を勤めたが、昭和四十三年四月に学生自治会準備委員の学生達八名と自治会規約について話し合いをした。その時の学生委員は草間先生、吉田先生、福島先生と私であった。

理学部の建物(A・B棟、放射研)が出来たのは昭和四十三年夏で八月三十日に図書館で人文・理学部校舎竣工の祝賀会が開かれた。それまでは、静岡市大岩にあった文学部内でプレハブの校舎などを利用していらした。建物が出来て移転を始めるすこし前に雨が降った。周辺整備が不十分なので、このままでは理学部の廊下は泥だらけになりそうであった。そこでスリッパを用意し、入口で履き替えてもらった。それで廊下は美麗さを保ったが、これをそのまま維持しようとする事になり、学生委員会は学生に協力して欲しい旨の文書を出した。靴履きでも支障は無いが、清掃の為の経費が節約出来るというのも理由の一つであった。

新しい建物、新しいキャンパスには活気があつたが、しかし騒音が付きまとい、私は教養部のある授業でブルドーザーの音がやかましく授業が困難であった事を覚えていた。ある卒業生の書いた思い出の中で「ダンブと一緒に勉強した」という文章を見た。学生がいわゆる団交をしていた時、片山砂漠という言葉が使われたことがある。誇張されているが一面当たっていた。企業の創業者が大変な苦勞を嘗めるといふことは話に出るが、私は理学部の最初の入学生達もかなり騒音・施設・生活環境等で苦勞した事と思う。

(2)この理学部の草創期で最も印象が深いのは、大学紛争であろう。もともとは他の大学における紛争が全国規模に拡大し静岡大学に

も波及してきた。急速に拡大した大学生の層に潜在的にあった不満が爆発したのか、それとも他の原因によるのか、いずれにせよそれは熱病のように大学生を駆り立てた。昭和四十三年十月十四日理学部学生と学生委員会(草間先生の代理として片山先生、その外に四ツ田事務官)は学生の諸要求について話し合ったが、十四日夕方から十五日朝七時までかかった。十月十六日第一回定期学生大会が開

かれ、十月二十一日(国際反戦デー)のストが可決された。十月二十一日は理学部を除いて各学部・教養部自治会のストライキが行われた。昭和四十三年十一月十一日早朝、過激派の学生が大岩にあった静大本部を占拠した。この日は間もなく学生が本部から退去したが、その時取り巻いていた学生達と乱闘となった。その後、学生運動はいよいよ激しくなった。詳細は記述出来ないし、私も全部は



知らない。ただ、あまりの異常さを示すためにもう一つの事件について述べておきたい。

法経短大は静大に併設されている短大であるが、静大の統合移転に伴い大岩から片山へ移転することになった。短大用の校舎を持っていて、静大の構内にあつて夜間教育を行っているが、組織上は別の短大である。この移転は法経短大にとつて有り難くないものであつた。勤労学生の通学が遠く

をたどった。決裂かと思われたが、最後になって人文自治会学生は退席した。そこで評議会と法短学生との話し合いが、文学部講堂で十一月十九日午前零時半から始まった。学長は不在で桐谷理学部長が学長代理を務めた。私は静大の厚生補導部委員として陪席した。移転に反対する法短学生と、移転は静大の基本方針とする評議員の間で話し合いがまとまるはずはなかった。法短学生は罵詈雑言を浴びせた。しかし評議員に話し合いを求るものとする何が出来るのか。法経短大の将来について何の権限も無いのである。施設の改善は概算要求によってなされるが、それは学長・局長の努力にまつほかばき無い。評議員はただ飛んでくる矢にたいする盾であつた。十九日昼頃から法短学生は講堂と外部との出入りを遮断し、また昼食の差し入れを拒否した。法短学生が机を積み暗幕を張り始めた午後三時前に静大の教官・事務職員多数が講堂に実力入り、評議員を外へ連れ出した。

法短学生とだけ話し合いを持つ事は出来ず、十一月二十日に全静大学生と学長との話し合いが行われた。紛争は長く続き私はその後もかかわりを持ったが、平穩になった今日ふりかえってみると、建設的な何物も残っていないように思われる。しかし私個人はこれから教訓を学んだ。それは「最後には常軌が通るものだ」ということである。ただしそれには、年単位があるいはもっと長い年月が必要であらう。

(3)紛争以外では、卒業生の就職についての活動が重要であつた。静大理学部を知ってもらふ事を主眼としてPR用の文書を発送し、また企業訪問を行った。訪問は東京方面と関西方面に分け、各学部の先生が担当した。私は四十三年五月東京に出掛け、日立・富士通・その関連会社・銀行・生命保険・出版社・計算センター等を二泊三日で訪問した。宿泊先で渋谷先生(物理)、曾根先生(化学、後にお茶の水大に転勤)と打ち合わせを行った。「うちは指定校制度をとっている」と言われた時は良い気持がしなかった。しかしこの制度も長い間には遂に無くなつた。昭和四十七年に関西方面にも出掛けたことを覚えている。今は会社の人事担当と会うことが就職委員の仕事の一つになつてはいるが、逆の時代もあつたのである。

II 昭和五十年以後を理学部の発展期とするのは、大学の内外情勢が落ち着いてきたと共に昭和五十年に地球科学科が発足、昭和五十一年に理学部研究科修士課程が発足、昭和五十二年に理学部C棟が竣工したことに依る。

そこで建物増築委員会が設けられ、私は数学科の委員となつた。増築の場合は新しい棟を建て、それぞれの学科に増加分だけ部屋を割当てるといふ訳にはいかなかった。理学部全体が機能的になるように、ある人には研究室から出てもらい、他の人にそこに入ってもらふことが必要となる。何回も何回も会議を開いて調整をしながら案を作成した。最初、学園広場の中で図書館に平行に新棟を建てる案を作つたが、文部省は認めなかった。数学科は基準面積の増加と大学院の設置により大巾の増加となるはずであつたが、現実には増加面積はかなり削られてしまつた。また東部地区共同利用の電子計算機を設置する部屋を要求していたが、この面積も認められなかった。そこでもう一度やり直し、少ない面積でA棟と平行に谷の側に建てることにした。ところでこのまま引き下がる訳にはいかない。私は知恵をしぼり、新しい講義室を数学科の中に設けることを認めてもらった。授業の外にいろいろ利用できることと、将来の増築のとき数学科の部屋としてそのまま活用出来るからであつた。現在の数学科共同研究室に上下に長い黒板が有るのは、その時の特別注文の名残りである。共同利用の計算機室については、ただ各学科にお願いし供出してもらうしかなかった。理学部の人だけでなく東部地区で共通に利用する部屋であるにもかかわらず、必要な面積(約二〇〇平方メートル)が確保されなかった。このことに対し私は感謝している。(私は東部地区

(1)地球科学科が出来たこと、大学院設置に伴い各学科の基本面積が増加したこと、数学科の基準面積が増加したことにより新しい建物を建てる必要が生じた。

計算機運営委員会委員長の立場にあつた。)とくに数学科には増加面積が減らされた中でのかなりの面積を供出してもらった。私が数学科の委員であつたとしても、このお願いは必ずしも数学科として当然の内容とは言えない。この機会にこの事を述べ改めて感謝の意を表する次第です。このようにしてC棟は建てられることになつた。C棟の大部分は数学科と地球科学科が占めることになつてはいたが、ある時、地球科学科の委員が土先生がお出でになつて、地球科学科をC棟の最上階に入れてもらえないか」といわれた。委員会では数学科が最上階に入ることになつてはいた。最上階は見晴らしが良く、気分は上々だからである。実際に住んだ経験によると何処の階も不具合あり、見かけほど良くはない。この話を聞いた片山先生(当時の学部長)いわく「馬鹿と鶏は上にあがりたがる」。私は言い出しにくくなつたが、ごまかされてはならじと、土先生と掛け合つた。「身の軽い者が上にあがるのは自然の理」と談判し、事は収まった。

(中略) 謝辞。理学部にいる間、いつも若い学生諸君に接し得たことを感謝しています。この機会に学生であつた諸君に改めて謝意を表し、私の思い出の話の終りとします。(編集部から) 先生からいただいた原稿の全文を掲載出来なかつたこととお詫びします。